



自らを進歩させる

Toshio Ikeda

コンピュータの
国産化に貢献

Episode. 01

「感動することから全て始まる」

戦後の復興期、通信機メーカーにすぎなかった富士通で「国産コンピュータをつくる」と池田敏雄は誓った。「感動することから全てが始まる」と試作を重ね、1954年に実用リレー式計算機FACOM100を完成。通常、人手では半年かかる計算をわずか3日でやり遂げ、物理学者の湯川秀樹博士を心底驚かせた。

池田の挑戦は終わらない。計算ミスをゼロにするため、コンピュータ自身が答えをチェックするという画期的なアイデアの実現に動く。新しいコンピュータの試作中、火事で図面が消失しても「頭に入っている」と諦めなかった。1956年、リレー式商用計算機FACOM128が誕生。初の国産旅客機YS-11やカメラレンズの設計に活用されるなど、日本の科学技術の発展に貢献した名機となった。

「IBMは巨大な象、日本メーカーは蟻」。そう揶揄され続けても国産コンピュータを次々と進化させ、仲間たちに挑戦を紡いだ。1974年に発表したFACOM M-190はあらゆる点でIBMを凌ぐと評価。科学や産業の発展に大きく貢献した。

「人間は絶えず自分を進歩させていくことに本当の生きている意義がある」。池田の情熱は富士通だけでなく、日本のコンピュータ産業の地平も切り拓いた。

池田 敏雄から学ぶ 【挑戦】の極意

Point 1: 好きを活かす

池田は、少年のころから数学が大好きで難問を解いては賞金を受けたり、ピタゴラスの定理の新しい証明法を発見したりした。考え出すととことん究めずにはおかない気質であった。

Point 2: 情熱に任せて、型を破る

入社後まもなく、池田敏雄の名を高からしめる出来事が起きた。ダイヤル事件だ。連合国軍総司令部 (GHQ) 民間通信局 (CCS) に導入された富士通製の電話機のダイヤル作動に障害が起きたのだった。騒然とする社内で池田はダイヤルの作動を理論的に解析し、問題の本質を明らかにした。これによって、池田の型破りを温かく許すムードが社内に浸透したと言われている。

Point 3: 追求し続ける

社内からFACOM100を販売しようという意見が出たが、エラーチェック機能を装備しているにもかかわらず、誤作動を見逃すことがあった。そのような機械はコンピュータとしてお客さまには売れないと池田が断固として反対したため、FACOM100はお客さまには販売されず、「商用」ではなく「実用」のコンピュータという記録になっている。そこから弱点を改善して、2年後の1956年、富士通初の商用コンピュータFACOM128Aが発売された。

池田 敏雄

戦後、日本の急激な発展に大きく貢献したコンピュータの国産化を力強く推し進めた人物。「コンピュータの天才」と広く称えられ、日本のコンピュータ史に名を刻んでいる。

